

## 第3回奈良県観光戦略本部会議 議事概要

日 時：令和8年2月6日（木）12:30～14:30

場 所：奈良県庁5階 第一応接室

出席者：本保 芳明本部長、西村 高則副本部長、枘田 斉志副本部長代理

尾久土 正己委員（オンライン参加）、高野 雅臣委員、野澤 弘樹委員、堀井 清孝委員

### ○事務局より、本部会議の趣旨・進行説明

- ・観光政策パッケージ（案）を踏まえ、奈良県観光の重点化と実装体制の在り方を議論する場とする。
- ・本日は尾久土委員がWEB参加で途中退席予定であるため、議事の順番を変更し、尾久土委員のプレゼンテーションを最初に行う。
- ・その後、野澤委員のプレゼンテーションを実施し、両プレゼンを踏まえて意見交換を行う。
- ・続いて、最新の観光データ及び観光政策パッケージ（案）について事務局から説明し、全体整理を行う進行とする。

### ○本部委員によるプレゼンテーション①

【尾久土委員】

- ・アストロツーリズムは世界的に研究・実装が進む分野。従来天文ファン向けのニッチな観光から、大衆化・高付加価値化へ移行している。UN Tourism 等でも注目される分野。
- ・星空は「見る観光」ではなく、宿泊を伴う動機づけになりやすい資源。滞在日数の延伸や夜間消費の創出につながる可能性がある。
- ・奈良県中南部は人工光が少なく、広域にわたって良好な夜間環境を維持している希少エリア。世界的に見てもポテンシャルの高い星空資源を有する。
- ・一方で、日本の気候特性上、星空単体では成立しにくい。昼間の自然体験や文化体験と組み合わせた滞在型観光設計が前提。昼夜一体で設計する必要がある。
- ・国際的な星空認証制度や光害対策を段階的に進めることで、星空を地域ブランドへと昇華させることが可能。
- ・星空ガイド育成は比較的参入障壁が低く、地域住民が担い手として関与しやすい。住民参加型観光の入口として有効であり、地域の誇りや生きがいにもつながる。

### ○本部委員によるプレゼンテーション②

【野澤委員】

- ・滞在型ラグジュアリー観光の考え方と社会的意義について提示。ラグジュアリーとは高価

格帯の施設を指すものではなく、静寂性、精神性、地域文化との関係性といった無形価値に重きを置く観光形態であり、それを通じて地域経済・文化・環境が相互に循環する新たな地方創生モデルである。

- ・海外事例では、少人数・分散型・長期滞在を前提に、地域の生活や文化に「一定の時間を預ける＝一時的な住民としてお邪魔する」形で、その土地の生活や価値観を深めていく体験を設計することで、高付加価値でありながら地域の疲弊を避け、観光資源の消耗や環境負荷の低い観光が成立している。
- ・ホテル単体の整備では地域全体の価値向上には限界がある。宿泊、移動、食、体験を一体としてマネジメントする「地域全体のホスピタリティ設計」が重要。
- ・奈良は、日本の精神文化の源流が現在の生活と地続き不可分で残る希少な地域。特に中南部は、距離や不便さにより、地域固有の自然・文化・生活様式が存在し、そのものが価値になり得るエリア。
- ・来訪者数の最大化を目指すのではなく、「誰に来てもらうか」を明確にした選択的な高付加価値な観光設計が、地域の誇りと持続性につながる。

#### ○プレゼンテーションに対する意見・評価

- ・近年の欧米豪市場や高付加価値層の旅行動向として、観光地選択においては「何を見るか」よりも「なぜそこに行くのか」「どんな意味を持つ体験か」といったストーリー性や体験の意味性が重視されている。
- ・今回の両プレゼンは、奈良県の本質的価値を軸に据えた内容であり、現在の市場ニーズと整合している。奈良は精神文化や歴史的背景など、本質的価値を持つ地域であり、高付加価値層への訴求は十分可能。
- ・海外においても奈良は潜在的な認知度や評価が高い。適切な切り口と発信が伴えば、高付加価値層を含む誘客につながる可能性は大きい。
- ・両プレゼンの方向性には共感できる。ただし、理念やブランドだけでは地域は持続しない。
- ・観光による収益が地域住民の生活にどのように還元されるのかが最も重要な論点。
- ・特に中南部や限界集落では、観光客が来るだけでは意味がなく、飲食・体験・移動など具体的な消費の受け皿が整っていなければ地域にお金は落ちない。
- ・都市部からの来訪者と地域住民との間には温度差が生じやすい。観光を通じて地域の生活がどう支えられるのかを、住民自身が実感できる構造を示す必要がある。
- ・滞在型観光では、宿泊施設だけが収益を得る構造では不十分。食事・移動・体験まで含めてパッケージとして設計し、収益の一定割合を地域側に落とす仕組みが必要。
- ・そのためには、収益の受け取りと分配、関係者間の調整を担う中間的なマネジメント主体が不可欠となる。
- ・地域を無差別に開くのではなく、来訪者像を明確にしたうえで選択的に受け入れることが、結果として地域価値の維持・向上につながる。
- ・観光を外部から与えられるものとしてではなく、地域自身が担い、育てていく仕組みを構

築することが、持続可能性の観点から重要。

- ・市町村長が先頭に立ち、地域主体で動く体制を設計すべきであり、地域の熱量を上げていくことが理想。

#### ○事務局より、最新の観光データと観光政策パッケージ（案）について説明

- ・事務局から、最新の観光データと奈良県観光の現状データ及び観光政策パッケージ（案）について説明があった。観光入込の回復状況、宿泊・消費に関する課題、観光の地域偏在などが示され、今後の施策検討における基礎情報として共有された。

#### ○事務局説明に対する意見交換

- ・観光政策パッケージ（案）は基礎整理としては妥当。方向性そのものを否定するものではない。ただし、いまは整理の段階ではなく、試行のフェーズに入るべき。
- ・エッジの立ったリーディングプロジェクトが必要。
- ・ターゲットを明確にしないと広く浅い施策になる。奈良県としてどの市場を狙い、どの層に価値を届けるのかを定めることが重要。
- ・ラグジュアリー市場は単発では成果が出ない。少なくとも5年、継続的に行うことが必要。
- ・県の限られた人・金では十分な成果は出せない。地域に入り込んで実際に動ける母体が必要となる。
- ・母体として、県が関与するDMOの組織を強化し、県が地域に影響力を行使できる体制をつくっていくことが重要。
- ・金の面においては、宿泊税も含めた新たな観光財源の確保、また分配のメカニズムについて議論すべき段階に来ている。

以上